

浄土

1987-2

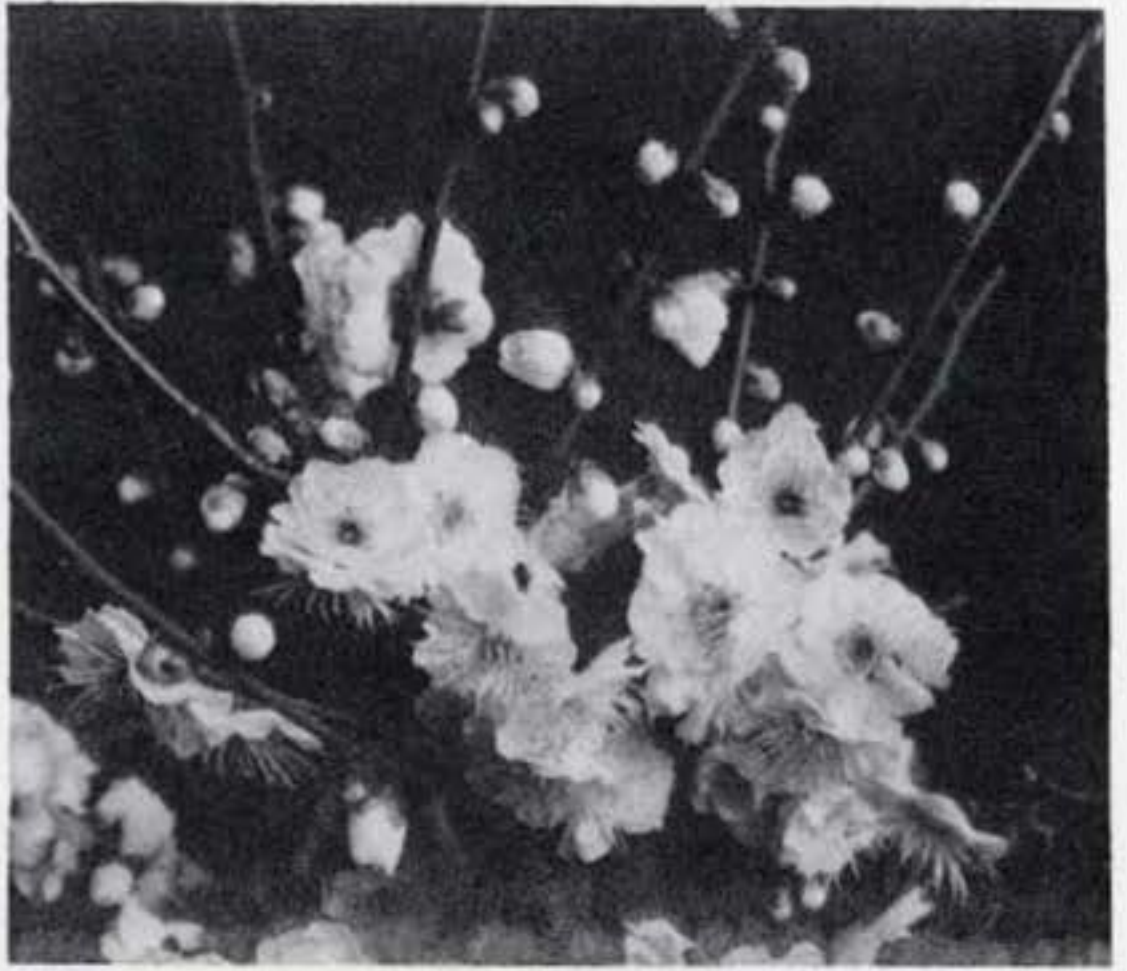
昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雜誌) 第三二五号
昭和六十二年一月二十五日印刷 昭和六十二年二月一日発行

第五十三卷

二月号



春



二月の秀句

風の耳拾ひあつめし二月かな

木村 敏男

山深く睦月の仏送りけり

西島 麦南

涅槃図を掛けんとすなる僧五人

高浜 虚子



是れより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という。
——『阿弥陀経』

目 次

—— 法 話 ——

涅槃会に寄せて……………金 子 寛 哉……(2)

エッセイ

心静かに……………藤 原 円 忠……(10)

<連載法話>①

大晦日の大念仏……………大 室 了 皓……(22)

=江戸物語=(1)

江戸は武家の町……………細 田 隆 善……(16)

み仏とともに =23=

——父の念仏信仰とその挫折(2)—— ……安 居 香 山 ……(28)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第32回

歴 史 の 空 洞

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「紅 梅」 松浦春子画

(法)

(話)

涅槃会に寄せて



(一)

『平家物語』の巻頭に、

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響あり
娑羅雙樹の花の色 盛者必衰の理を現わ

金子寛哉

(大正大学講師)

す 奢れる者久しからず ただ春の夜の
夢の如し

と言う文がある。これは今更言う迄もなく、
中世の一時期を飾った源氏と平家の栄枯盛衰
を語る物語の書き出しの文であり、また同時

にこの物語の結論でもある。この物語の作者は、この短い文の中に、釈尊伝に基づいて、釈尊の説かれた道理と、釈尊自身の入滅と言うことを述べ、そのことを通して「栄える者も何時かは衰え、生命ある者は全て亡びる」と言う、無常観を示しているのである。そしてしかも、この諸行は無常であると言う道理をもつて、この物語り全編を貫こうとする意図を示している。

源平の戦いについては『平家物語』自体に譲り、私が今ここでこの文を取り挙げたのは、この物語の作者が、今からおよそ七、八百年も以前に釈尊の入滅の記事をなして、人々に世の無常を訴えている事実注目したためである。つまり、当時の多くの人々の意識の中には釈尊の入滅を伝える釈尊伝や経文が或る程度常識化されていたのではないかと推測されるのである。

今の文に見られる「祇園精舎」が「祇樹給孤独園」の略称であることは言う迄もない。

釈尊伝によると、釈尊がまだ健在で布教活動を続けていられた頃、コーサラ園のシェータ太子が所有する園林を、スダッタ長者が黄金を敷きつめて買い取り、釈尊とその弟子達のために精舎を建てて供養したという有名な物語りが見られる。このような有力な外護者を得、すばらしいその悟りの境涯を多くの人々に説き続けた人間釈尊も、やがて八十歳で入滅されるのである。

「娑羅雙樹の花の色」の句が、釈尊入滅の状況を意味することも、釈尊伝を繙いたことのある人であれば誰でも知っていることである。このようなことから考えると、今から七、八百年も前の日本の人々が持っていた釈尊の教えとその入滅に対する認識が、いかに深く浸透していたかと言うことを今更のように思い返されるのである。

このような『平家物語』の文一つを取り挙げて見ても解るように、我々の心の中には、人間釈尊の入滅と言うことが、意識するとし

ないと係わらず、早くから深く、静かにしみ込んでいるように思われる。しかし、そのように無意識の中に深くしみ込んでいながら、その事自体を取りあげて云々することはあまり多く見られない。それは、人間誰しも知っている事であり、感じていることではあるが、それ自体には触れまい、或いは触れたくないと言う気持が、無意識の中にどこかで作用しているからではないのだろうか。

拙寺の年中行事を例にとって考えても、釈尊の誕生を祝うお花祭り、その教えに基づく春秋の両彼岸会とお盆会、そして悟りを開かれたことを記念する成道会等に比べ、涅槃会は季節的にも二月十五日と言う、一年中でも最も寒さの厳しい時期に当るせいもあってか、行事そのものが非常に静かでつつましかに行なわれている。拙寺でも二月十五日前後には、涅槃図を掛け、ご供養をするのであるが、お参りに来る人も殆んどない。かつて、近所のお婆さんが、涅槃会の頃になると

必らず本堂に掛けられた涅槃図の前で、一人静かにお参りしていた姿が思い出される。そのお婆さんが亡くなってからもう十年も経っている。又一時期は、少しでもこの法会を盛大にしようと考え、地域の仏教婦人会の新年会と併せて行なったこともあったが、やはりなじまなかった。それは、新年会と涅槃会とはその主旨が異なる為ではないかと思われる。涅槃会はやはりにぎやかにお祭りさわぎをする行事にはなり得ないと言う本来の性格を持っている為でもあろうか。

涅槃会が釈尊の入滅した日を記念して行なわれる法会であることは既に述べた通りである。この法会はまた涅槃忌とか仏忌、或いは常楽会などとも呼ばれている。釈尊の入滅を伝える經典によると、その入滅された日については幾つかの説が分れるようであるが、中国では、北魏の頃既に二月十五日の説を用い、日本でも多くはこの説により、今日では二月十五日が涅槃会と言うことになっている。

釈尊の入滅を何故「涅槃会」と言うのかと言ふ点については少し順序立てて述べる必要がある。

(二)

涅槃とは梵語のニルヴァーナを音写した言葉であつて、また、滅、寂、寂滅、滅度などと意識されている。その本来の意味は吹き消すこと、また、吹き消した状態をあらわし、燃えさかる煩惱の火を滅尽して、悟りの智慧を体得し、その境涯が完成された境地を指して言うのである。つまり、輪廻転生する生死の世界、迷妄の世界を越えた悟りの世界を意味するのであつて、釈尊の教えの究極的な目的でもある。従つて、仏教と他の宗教とを區別する為に用いる諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三宝印の一つにこの涅槃が数えられるのも、このような意味からである。

以上のような「涅槃」本来の意味からすれば、釈尊が尼連禪河のほとりで迷いのない、

正覺の境涯に入られた時点で、精神的な意味では釈尊が既に入涅槃されたことになる。所が、この涅槃に対する受け取り方が後には思想的に次第に展開され、小乗では「有余依涅槃」(煩惱は断じたが、肉体がまだ残っている状態)と「無余依涅槃」(すべてが滅尽した状態、灰身滅智)の二つに分け、大乘では涅槃を更に積極的な面で考え、「有為涅槃」(常・楽・我・淨のない小乗の考え方)と「無為涅槃」(常・楽・我・淨の四徳を具えている)の二つとし、「無為涅槃」を最上の涅槃であるとするのである。また、唯識宗などでは小乗の二種涅槃の上に、更に「本来自性清淨涅槃」(真如そのもの)と、「無住処涅槃」(智慧によつて煩惱・所智の二障を離れ、生死に止まらず、また大悲をもつて衆生救済の為に迷いの世界の中で活動する)の二種を考え、併せて四種とし、この中「無住処涅槃」が大乘仏教における涅槃の最高のものとするのである。これらの外にもまだ種々の考え方はあるが、その大要は以上

の説によつてほぼ尽されているように思う。

このような涅槃の思想的展開は兎も角、我々が今日涅槃會として受け取っている涅槃は小乗で説く二種涅槃の中の「無余依涅槃」、即ち正覺を成ぜられて「有余依涅槃」へ入られた釈尊が、その後の布教活動も終えられて、クシナガラで八十年の生涯を閉じ、その肉体も亡び去つて行つた人間釈尊の入滅を意味するものであることは言うまでもない。その釈尊入滅の最後の様子を『仏遺教經』では次のように記している。

釈迦牟尼仏は初めに法輪を轉じて阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度したもう。度すべき所の者は皆已に度し訖りて、娑羅雙樹の間に於て將に涅槃に入りたまわんとす。是の時、中夜寂然として声無し、諸の弟子の為に略して法要を説きたもう。

と述べている。この『仏遺教經』は今日でも涅槃會の折に広く誦誦されている。經文そのものは長くはない。釈尊が入滅間ぎわに弟子達に向つて簡潔に教えを説かれたものである。その要点は布施を除いた五波羅蜜と、少欲知足等である。この『仏遺教經』の訳者が浄土三部經の一つである『阿彌陀經』の訳者と同じ鳩摩羅什であるのも興味深い。唐朝第二代の皇帝太宗の内室である、文德皇后が、この經を厚く信奉し、官の勅命をもつて寫經させ、諸州に流布させたと伝えられる。この文德皇后の病氣平癒を願つて、太宗が石壁山玄中寺へ道綽禪師を訪ねられたことも玄中寺にある『鉄弥勒像頌碑』に記されている。

一方、『大般涅槃經』に依ると釈尊入滅時の様子を次のように記している。

……是の諸の衆生、是を見聞し已りて心大いに憂愁し、同時に声を挙げて悲号啼哭すらく、「嗚呼慈父、痛しき哉、苦し

き哉」と。手を挙げて頭を拘ち、胸を槌ちて叫喚す。其の中、或と身体戰慄し、涕泣哽咽するもの有り。爾の時に大地、諸山、大海、皆悉く非動す。時に諸の衆生、共に相謂つて言はく。「しばらく各々裁抑して、大いに愁苦すること莫れ。当に疾く、拘尸那城の力士生処に往詣し、如来の所に至りて頭面に禮敬し、『如来般涅槃したまふことなく、世に住すること一劫、若は滅一劫したまへ』と勸請すべし」と。互相に手を執り、復是の言を作さく。「世間は空虚となり、衆生は福尽き、不善の諸業増長して世に出でん。仁者、今当に速やかに往き、速かに往くべし。如来久しからずして必ず涅槃に入りたまはん」、又是の言を作さく、「世間は空虚となり、世間は空虚となれり。我等今より救護あること無く、宗仰する所無し。貧窮孤露にして、一旦無上世尊に遠離せば、設し疑惑有らんとし、当に

復誰かに問ふべき」。

と述べ、そして最後入滅の時の様子については、

爾の時に拘尸那城の娑羅樹林、其の林變じて白きこと猶し白鶴の如し。虚空の中に於て自然に七宝の堂閣あり。彫文刻鏤し、綺飾分明にして、周匝に欄楯あり、衆宝雜廁せり。堂下に多く流泉、浴池有り。上妙の蓮花其の中に弥満し、猶し北方鬱單越国の如く、亦忉利天の歡喜園の如し。爾の時に娑羅樹林の中間の種々の莊嚴の甚だ愛樂すべきことも、亦復是の如し。是の諸の天人、阿修羅等、咸く如来涅槃の相と觀、皆悉く悲感し、愁憂して樂しません。

等と記している。我々が今日二月十五日の涅槃会の時に掛ける涅槃図が、これらの経説を

基に絵画化したものであることは言うまでもない。

(三)

釈尊が入涅槃された時の様子を経説等に基づいて表現したものには彫像と図像の二通りがある。彫像は記録によるとインドでも五世紀頃から既に見られ、それ以来仏教圏の各国では臥仏、睡仏、寢釈迦等として奉祀されている。しかし、彫像の場合はその表現も技術的に限られる為、臥仏そのものが中心となり、単純化されざるを得ないのであるが、涅槃図として絵画化される場合は変化に富んだ表現が見られ、経説をそのまま具体化し得るようになった面もある。涅槃図も古くは敦煌の石窟中に既に見られ、日本では現在国宝に指定されている物も多数見られている。今それ等の画図を一々紹介するいと間もないが、ただ気になるのはこれらの涅槃図の図柄は一体どのような構成されているのだろうかと言

う点である。一般には猫の絵の有無等も問題にされるようであるが、これ自体はそれ程特異なことでもないようである。しかし、現存する涅槃図には幾つかの形があることだけは確かである。ただそれらの中で、特殊なものは別として、多くの涅槃図に共通するのは『大般涅槃経』等に説かれる五十二衆が画かれているということである。図によっては主なものに一々絵像に名前を記してある物もあるが、多くの場合は絵像のみである。

このようなことから、今念の為に『寂照堂谷響統集』第十によって五十二衆の名称を揭示すると次のようになる。

(1)比丘衆、(2)比丘尼衆、(3)比丘尼衆中の十地菩薩、(4)菩薩摩訶衆、(5)諸優婆塞、(6)諸優婆夷、(7)毘舍離城諸離東等、(8)大巨長者、(9)毘舍離王及び其の夫人後宮眷属、閻浮提内所有の諸王(阿闍世王を除く)并に人民、(10)諸王夫人(阿闍世王夫人を除く)、(11)諸天女衆、(12)諸龍王等、(13)諸鬼神王、(14)金翅鳥王、(15)乾闥婆

王、⁽¹⁶⁾緊那羅王、⁽¹⁷⁾摩睺羅伽王、⁽¹⁸⁾阿修羅王、⁽¹⁹⁾尸陀那婆王、⁽²⁰⁾羅刹王、⁽²¹⁾樹林神王、⁽²²⁾持呪王、⁽²³⁾貪色鬼魅、⁽²⁴⁾天の諸采女、⁽²⁵⁾地の諸鬼王、⁽²⁶⁾諸天子等、⁽²⁷⁾四方風神、⁽²⁸⁾主雲雨神、⁽²⁹⁾大香象王、⁽³⁰⁾師子獸王、⁽³¹⁾諸飛鳥王、⁽³²⁾水牛牛羊、⁽³³⁾四天下中の諸神仙人、⁽³⁴⁾閻浮提中の一切蜂王、⁽³⁵⁾⁽³⁶⁾閻浮提と無量の世界との中間に於ける人天衆、⁽³⁷⁾閻浮提所有の山神衆、⁽³⁸⁾四大海神及び諸の河神衆、⁽³⁹⁾四天王衆、⁽⁴⁰⁾釈提桓因及び三十三天衆、⁽⁴¹⁾夜摩天衆、⁽⁴²⁾都率天衆、⁽⁴³⁾衆變化天衆、⁽⁴⁴⁾第六天衆、⁽⁴⁵⁾大梵天王及び梵衆、⁽⁴⁶⁾阿修羅衆、⁽⁴⁷⁾欲界魔天波旬衆、⁽⁴⁸⁾自在天衆、⁽⁴⁹⁾東方仏世界無辺身菩薩、⁽⁵⁰⁾南方仏世界無辺身菩薩、⁽⁵¹⁾西方仏世界無辺身菩薩、⁽⁵²⁾北方仏世界無辺身菩薩、等である。これ等五十二衆の名称を念頭に置きながら、改めて涅槃図を見直して見るのも又意義があるのではないかと思ひ、敢えて書き連ねて見た。これ等五十二衆の名称のみから見ても解るように、この経説の作者は、

須弥山説をもとに、その世界に所属する全ての事象が釈尊の入滅をいたみ、悲しみ、しかも天地のみならず、諸仏世界の諸菩薩までが鳴動している様子がうかがわれるのである。

最後に浄土の教えと涅槃会の係わりについて考えて見よう。私は浄土の念仏の教えも釈尊の入滅ということ、一つの要素として展開されているのではないかと考えている。中国浄土教の祖師道綽禪師はその著『安樂集』の中で、浄土門の教えが必要な理由として、釈尊が入滅してから長い長い時間が経過してしまっている（「遙遠」と表現）ので、聖道門の教えでは理解も実践も不可能である、と言うことを挙げてゐる。つまり、浄土の教えもその基をたどれば、釈尊の入滅と言うことを一要素として展開されたことになる。道綽の伝説には、師が浄土の教えに帰依する以前に『涅槃経』の研究者であつたと記されている。これらの点から考えてもこの事はうなづかるのではないかと思う。

心
静
か
に



○

大分以前の事だが、東京の池袋で一寸覗いた骨董の店で、小さなお針箱くらいの大きさ

の木彫りのカエルを買ってしまい、エッチラオッチラ抱えて帰った事があった。

無尽蔵という此の店の、体が大きくて僧侶のように頭を剃り中国風の長い服を着てチベ

藤^{ふじ}原^{わら}円^{えん}忠^{ゆう}

(市原市無量寺住職)

ット風とでも云うのかいろいろと首飾り等をつけた主人が勧めた、世界の至宝の如き品物は私には縁の無い高額なものだったが、私は財布の気嫌を見ながら、素人が作ったような不格好さで、すまして四つんばいになっているところが気に入って買ったカエルの置き物は、背中がくり抜いてあって、香炉にも使えるという口上で、木で作った蓋には蟹が彫つてあった。

カエルとカニは、東南アジアの水田耕作地帯では、豊作の御使いとして大変縁起の良い動物として尊ばれるという説明であった。何かを願い祈るという心情を私が好きだということもあって、それで豊作のお使いを買って見たくなったのかも知れない。

人々は絶えず何かを祈り願うものである。

○

私の寺の境内に空地が多くあった頃、低い土堤の竹藪の一部に犬を埋葬する事が時々あった。ところが、どこで聞くのか遠方から女の人達が何人かずつ集まってお参りに来るころが良くあった。犬のお産は軽い、と言うところから安産を祈願するのだという。

最近各地の神社仏閣に合格祈願をする人達の数が大変多いという。

お年寄りが、永く病気で臥す事のないようにポックリ死ねるようにお参りに行くという話も聞く。

年をとって、ボケないようにお参りするボケ除け○○様と言う仏様もおいでだと聞く。

近頃は、福が多くある事を願って、七福神巡りがはやって来たそうである。

そう言えば、台湾では、商売繁昌子孫繁栄のために、墓地の適地を探してくれるプロの方が居るとも聞いた。陰と陽の合するところ

即ち、海と山が接するところの海に面した土地で、プロの人がその周辺を歩いて靈氣を感じずる一点を外れてはならないという。

又華僑の祀るお寺の中にば、ギャンブルの神様をその一部に祭ってあって、ギャンブルに勝つためにお参りをするのだという、昔は、ギャンブルの神様は阿片がお好きで、神様の口へ阿片を吸わせる、というお参りの仕方があったが、今は煙草を吸わせるとか、お線香を上げるとか、印刷した模造のお札を燃して神様に捧げるといふ事が多いと聞く。

こうして見ると祈りも種々で、中には疑念を禁じ得ないものもあるが、一概に否定してはいけない事なのだと思う。

○

私の寺の総代さんで「大衆は愚にして賢也」と言う言葉を座右の銘としている人がい

るが、多くの人々の種々雑多の願い祈りの中にこそ本当の心があるので、それらはひとま只是素直に認められるべきものだと思う。

しかしお経の中にも、一切は唯心が造る、という教えもあり、どんな心で生活するかという事が大事な課題である事には変りないであらう。

ビルマでは、フクローは神聖な鳥とされているという。いたずらに惰眠をむさぼる事なく夜も覚めてあるからだという。そのように心に聞かせて放逸になる事を戒しめたのである。法句経に「人もし自己の愛すべきを知らばすべからくよく自己を守るべし、賢き者は、夜の三分のうち、せめて一分をさめてあるべし」と言う語がある。

そう言えば、お寺の木魚にも、魚のように夜でも大きな目を開けて勉強に励めという教えがあるという。

○

中国の一般家庭では正月（旧正月）には、家の入口両側に、対句となつてゐる目出度い言葉は大書して貼る習慣があるそうで、各部屋の入口すべてにも新年をことほぐ言葉が貼られる。これらは家の中に住む人達が、明るく活き活きとして一年を迎えられるようにという願いを心に印象づけるものだろう。

仏事で印象に残つたのは、中国へ旅した時に方々見学させてくれたがその中で、病院を見学した時に、患者さんの一人が腕に黒い喪章を巻いているのに気が付き、案内の人に説明を求めたら、両親の四十九日迄は喪を忘れないために腕に喪章を付けるのだ、と教えられた。喪章だけでなく帽子やくつで喪を表する事もあるとも教えてくれた。これ等は毎日の生活の中で家にあつても外にあつても、父

母の喪を心から忘却する事の無いようにという心づかいであろう。

○

お檀家さんの一人で明治の頃は船主で、東京まで米や薪を運んでいたお宅があつて、当時の船の積荷台帳を見せてもらった事があつたが、その帳面の書き初めのところには、目出度く書き初め、と書かれていた。これも願い祈る心の一つであろう。

かつて、寺の掲示板に「思いが信念となり、信念が現実となる」と書いた事があつた。何人かの人から、この通りなんですよねー、と共感された事があつたが、願い祈りと言う事が、外側からの何らかの働きを待つばかりではなく、むしろ内なる心をどちらかに向けて行く事によって何らかの結果を得ようと努力してゐるのだと受け取ることが出来るように

思う。

お経に「貧しく社会的地位や信用も無い家に生まれ、貧しい生活を営み、しかし自分では善い行ないをし、口には善い言葉を語り、心に善い思いを抱くとしたら、その者は、この世にあっては善い業をつづけ、死して後は善きところへ赴くであろう」という教えがある。

人はその為せる所業によりきまるといふ。所業はすべて心の産する所のものだといふ。ならば自分の心をどう作るか、どの方向に心を近寄せようとするかは大事な事だと言わなければならぬ。

心を近寄せて行く方向にはいろいろあるが、心の特性としてお経には「或時人と諍つて、怒ることがあつたとして、一生の間少しではあるが憎んだり嫉んだりを続けたとすれば、後の世には大いなる怨となる」と説かれてい

る。心の中に貯めたものはだんだんと大きくなると教えるのである。自分の心を神仏に近寄せるか、悪魔の方へ近寄せるか、心が向いた方向へ無限大に開いて行くとしたらその差は大きいはずだ。

○

世の中にはいろいろな生き方の人がいる。

石川や浜の真砂は尽きるとも世に盗人の……と心に決めて過ごす人も居るだろう。人間五十年下天のうちに比ぶれば……と短い生涯を思い切つてただひたすら前進一途にかける人もいるだろう。又、心の寄るべき方向を自から定めて、敷島の大和心を人間わば朝日に匂う山桜花……と生きた生き方も、武士道とは死ぬことと見付けたり……と生きた生き方も、心の寄り行く方向を正しく見付けた一例として立派だと思ふ。

しかし仏教的には今一つ加えるべき要件があると思う。それは我と云う意識を超えたところに心を寄せるといふ事で、そのことこそ安心へ向かうことであつて善であると説く。

私達は、ともすれば我執にとらわれて、私達の思ひは狭いカラに閉じ込め、ニッチもサッチも動きが取れなくなることもある。

ある時は、欲しい欲しいと思つてもそれが手に入らない為に起るいら立ち、怒りが更に心に深く染み込んで憎しみが増幅し害を加えようとする意識が育つたり、物事を悪い方へ悪い方へしか考えられない愚かさ故に、悲しみ苦しむのは人の常で時として止むを得ない事だと思われ勝ちだが、そういう心情を乗り越えるような心の置き方、心の寄せ方をすべきだと仏教では教える。

お釈迦様は肉体を苦しめる修行を實踐して悟る事を目指されたが、肉体を苦しめて求め

るのは誤りであると認めて苦行を止められ、静かに瞑想して悟りに至られたという。

吐く息を大きくすれば自然と吸う空気の量が多くなるのと同じように、心を正しく整えて心を空っぽにすれば外から何かが心の中に入り易くなる。心が空なら大きな立場に立つて安定した物の見方が出来るし、右に寄り左に突き当る心の不安も薄れるのではないか。私達が心静かに念仏を称えるときは、吐く息吸う息がすべて念仏となり、心を無にすれば心をさまたげるもの少なく大いなる空と同化して我が心を再生浄化してくれて、静かでありろいろな事に対応出来る柔軟な、自我の領域を超えたところに心が拡がって行くように思える。それは般若心経で教える空の大事さと相通ずるようだ。そこには静かさの中に何かしら湧き出ずるものがあるように思う。



江戸物語

(1)

江戸は武家の町

細田隆善 ほそだ りゅうぜん

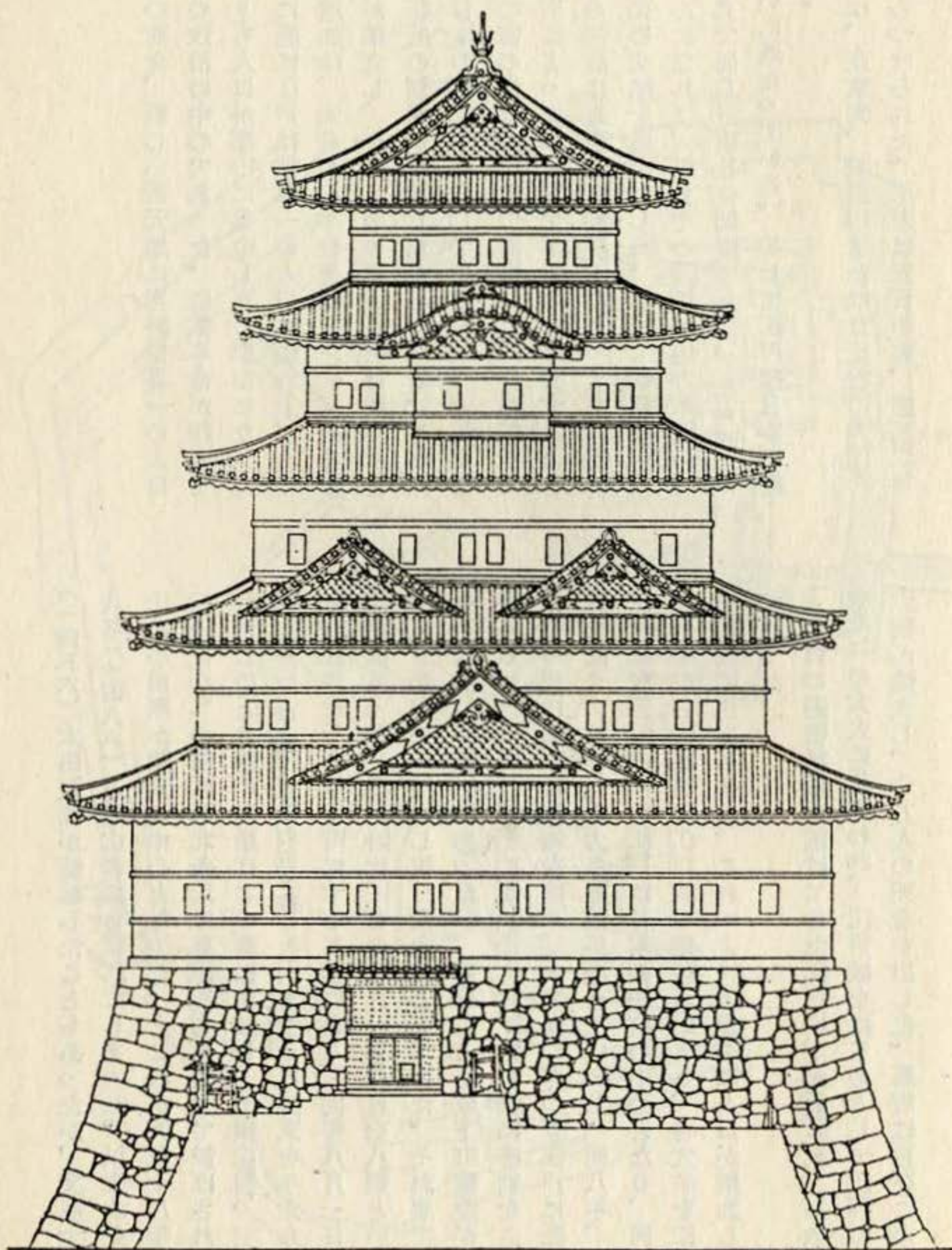
(俳号・豊明)

私たちの日常生活、衣食住、風俗習慣の多くは江戸時代に基礎づけられたものが多く、その上に明治以降の西洋文物を取り入れたものである。最近江戸ブーム、各地に江戸村が出来て観光客を楽しませている。東京都においても広大な「江戸東京博物館」が建設されようとしているが、ひと足先に江東区に「深川江戸資料館」が開館し、好評を博している。最近の江戸ブームは、明治の行政が、フェノロサをはじめ心ある外人の指摘にもかか

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

わらず過去の文物を捨て急速に外国文物を取り入れて一新しようとした風潮に対する、反省警鐘でもある。

江戸城天守閣南面図

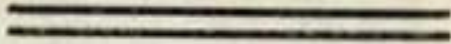


江戸は東京の前身、新しい新天地に当時世界一の人口を擁し、日本の政治の中心であった。産業革命が起きてロンドンもパリも人口が都市に集中し百万都市になったが、それ以前に既に江戸は世界一の人口に膨れ上がっていた。人口の増加は、大名が一年おきに江戸に詰める参勤交替の制度が確立し、かつ大名の妻と長男は江戸に常住させる妻子在府の制度が定着したためである。これによって江戸が日本の総城下町として発展し、一大消費都市として全国の富の半ばが江戸で消費され、打ち続く江戸三百年の泰平によって江戸文化が発生し発展するようになった。この制度は封建社会制度下にあっても、江戸と地方との文化の交流を盛んにした。江戸で歌舞伎十八番の芝居が盛んになれば、忽ちその芝居が地方に伝わった。こうした点で同じ封建社会制度でも、プロシャ（ドイツ）とは大いに異なっている。そして江戸は日本の縮図でもあった。

江戸の地名は、東京湾、隅田川または日比谷の入江の入口の意味からつけられた。江戸は五百年前、康正二年

（二四五六）太田道灌が築城したこともあったが、文明十八年（二四八六）道灌亡きあと寂れてしまった。以来北条氏の小田原が関東の中心となった。ところが天正十八年（二五九〇）、小田原の北条氏は豊臣秀吉によって滅ぼされた。このとき徳川家康はこの戦に参加し、旧領（駿河、三河、遠江、甲斐、信濃の五カ国）と引き替えに関東を与えられ、江戸をその城下町にすることにより、同年八月一日江戸に入った。江戸時代、この八月一（朔）日を八朔といって五節句の一つとし祝日記念日としていた。それまで江戸は淋しい漁村であったが、家康による城下町建設が進められた。慶長五年（二六〇〇）関ヶ原の戦に勝利をえた徳川氏は天下の覇権を握り、大名はつぎつぎ江戸に証人を置き、このため大名屋敷が増えていった。同八年、江戸幕府開設に伴い江戸は日本の政治の中心となり、同十一年から大規模な江戸城の建設が始まり、各大名を江戸建設に協力させた。これによって急速に人口が増加していった。

人口の過密状態を続けてきた江戸は、明暦三年（二六五七）の大火に見舞われ、江戸城をはじめとして江戸の六割が焼失し、十万人の死者を出した。幕府は再びこの



ような災害を防ぐため、大規模な都市再開発を実施した。まず本所深川の埋立によって市街地を拡大、都心の寺社を移し、グリーンベルトの広小路を各所に造り、大火の原因となった各町の材木置場を永代島(深川)に集結させて木場を創設し、大江戸を造成した。それが完成したのは元禄十四年(一七〇二)、「松の廊下」の事件のあった年である。大江戸の面積は八十七平方キロ、明治十一年東京十五区が出来た地域である。人口は明確ではないがおよそ百三十万、世界一であった。その内訳は武家関係が六十五万、寺社関係が五万、町地関係が六十万といわれている。面積の六割が武家地、二割が寺社地、あとの二割の土地に人口半ばの市民が町地にひしめいていた。江戸が武家の町といわれた理由は、江戸城をはじめ、諸大名の屋敷、旗本御家人の屋敷などが大半を占めているためである。

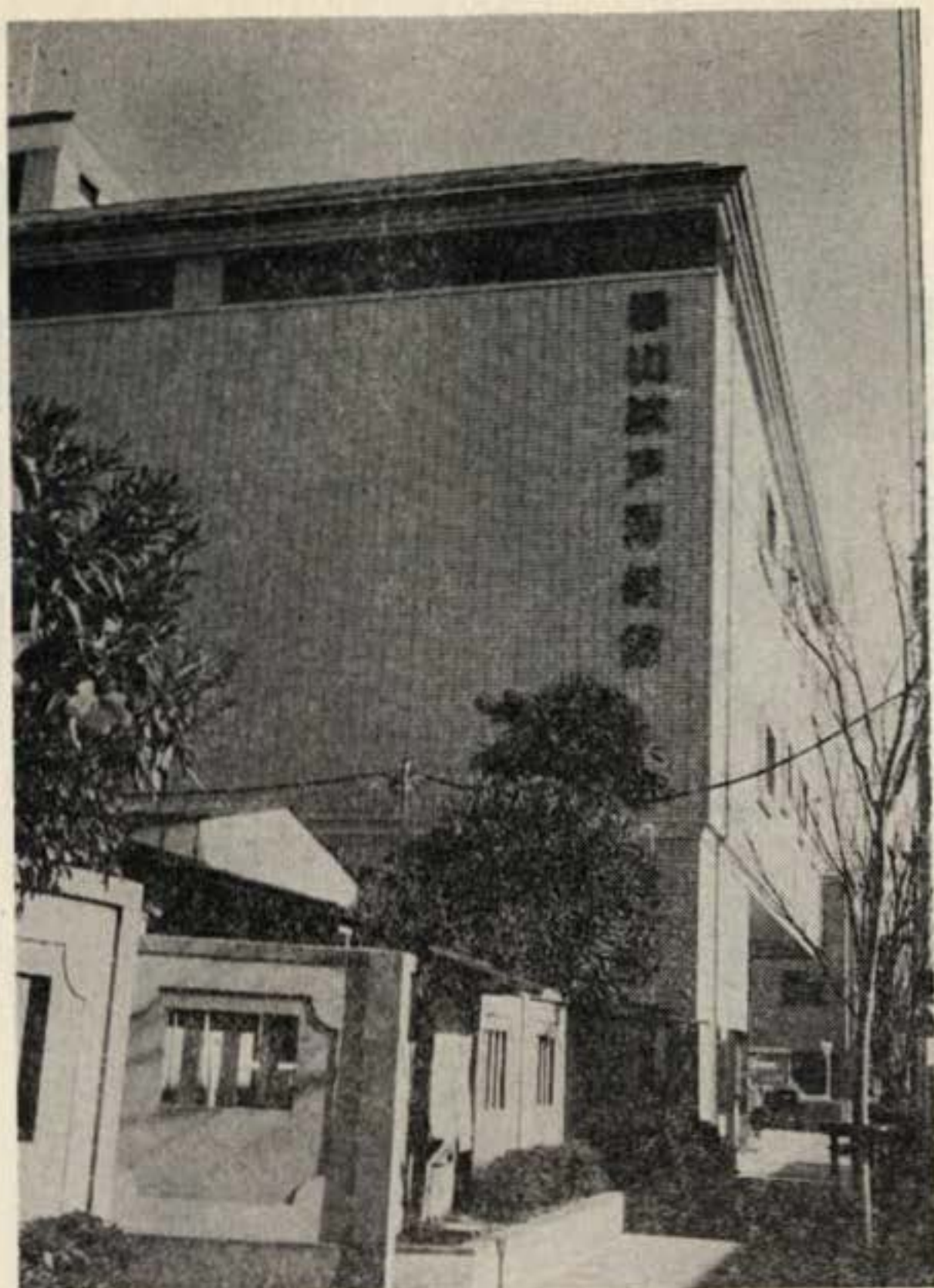
江戸は広大な江戸城が特色である。江戸は総城下町として建設され、江戸城は外郭と内郭に区別する。まず外郭は外濠の内側のことであり、ここに武家屋敷、町屋、寺社が計画的に配備された。外郭は東に隅田川、浅草橋、御茶の水、水道橋、飯田橋、市谷見附、四谷見附、赤坂

見附、溜池、幸橋、数寄屋橋と連続した外濠の水を巡らす広大な地域であった。内郭は内濠に囲まれた城内のことで、本丸、二ノ丸、三ノ丸、西ノ丸、北ノ丸などがある。内郭の総面積は三十万七千坪、わが国最大の城郭である。本丸は將軍の居所であり、幕府政治の中枢が置かれている。ここに五層の巨大な天守閣がそびえる。高さ地上から五十八・六四メートル、諸大名を威圧する偉容を誇ったが明暦三年の大火に焼失し再び建造されることなく、わずか五十年の寿命であった。今は当時の石垣だけを見ることが出来る。本丸は表、中奥、大奥に区分する。表は幕府の中央政庁が置かれ、中奥は將軍の公邸、大奥は御台所(將軍の本妻)、側室たちがいる將軍の私邸である。本丸は弘化二年(一八四五)の資料によると一万一千三百七十三坪、これまた世界最大の木造建造物であった。

「深川江戸資料館」は、江東区が往年の深川区役所跡に建造したもので、昨年十一月十六日からオープンした。天保のころの深川の町並みの一部を原寸通りに建造した

もので、船宿^{ふなやど}、火の見櫓^{やぐら}、米屋、八百屋、旅籠^{はたご}、屋台、水茶屋^{みづぢや}など江戸時代の下町の面影を偲ぶことができる。

また数年後に東京都が建造する「江戸東京博物館」は、延べ三万平方メートルを越える世界屈指の巨大な都市博物館である。この都市博物館に「江戸」と冠称がつけられているのは、



——深川江戸資料館

(東京都江東区白河、手前は靈巖寺境内) ——

東京の前身の江戸に重点が置かれるからである。この博物館の建設を早急に念願して、私が東京都に昭和五十三年六月三十日陳情し、翌年七月十日これが可決決定を見て、東京都が建設することになったものである。以後紆余曲折を重ね、数年後には下町に建設される予定である。これがオープンすると江戸ブームに一段と拍車をかけることになるであろう。

(つづく)

付記——カットは、三葉葵紋^{みつばあおい}

(徳川家康の紋)

連

載

法

話

<1>

大晦日のお念仏



私が大本山増上寺にお手伝いにくってから、
今年ではや五回目の春を迎えることになっ
た。

それまでは、大晦日ともなれば、炬燵にも

ぐって、紅白歌合戦をたのしみ「ゆく年くる
年」の鐘の音を聞く頃になると、

「それっ新年だ」

と色めき立って、正月料理を早々と出させ、

おおむろりょうこう
大室了皓

(大本山増上寺執事
東京・品川区光取寺住職)

「乾杯だ、今年はきつといい年になるぞ」

と私が云えば、

「去年もそんなこと云ってた」

「だから良かったろう。いつだって仏さまがついてるんだ」

「また、お説教だ」

家族にからかわれながら、それがまた嬉しくなつて、また乾杯。

そんなわけだから、元旦だって早起きできよう筈はない。早朝、威儀を正して本堂でのおつとめをしていた先代がさぞ嘆いていることであろう、と自省しつつ遅い勤行をすませ、あらためて「おめでとう」と云いわけし、雑煮を祝う。

ところが、この五年ほどは、紅白など見たこともない。大体が大晦日、家にいないのだから。

増上寺も十数年前には、初詣の人たちは数えるほどであったと聞くが、境内地の整備と相いまって次第にその数も増え、今年の大晦

日・元日にかけての人出は約十五万人ほどにもなった(警察発表は十万余)。特に十一時半から午前二時頃までは境内に人が溢れて、大殿や安国殿内は身動きできぬほどの賑いであった。

あちこちに設けられた札所のいそがしさはたとえようもない。私は毎年の務めとして安国殿札所にいることにしているが、めまぐるしい中にも、ほっと心のなごむことがある。

出合いもその一つだ。

「やあ、今年もお元気ですね」

と声をかけてくれる人が、なん人もいるのである。

なん万人も来る人、それもいつ時にである。一々顔など憶えているわけではない。向こうもそんな事は承知の上でなお声をかけてくれるのである。

札所に立っている山内職員の態度、参詣者への応対には屢々感心させられる。三百円のお守りを渡すのにも、いそがしいにもかかわ

らず、

「おめでとうございます」

「良い年でありますように」

受験合格のお守りなどには、

「合格、祈っています」

「受かったら、また来て下さい」

などと声をかけている。

「ハイ、どうぞ」とだけで渡してあげるのとは大違いだ。若いお坊さんの元気な、こうした言葉にほとんどの人たちは、

「有難うございます」

と嬉しそうに応えている。お守りは商品ではないけれども、買った客が礼を云うのである。

私もその中にまじって、若い人たちの手伝いをするように努めているが、狭い札所は熱気に満ちて、二時間位はあつという間に過ぎてしまう。

参詣者に若い人が圧倒的に多いのも嬉しいことだ。もっとも冬の深夜の初詣は老人には

無理なのかもしれない。

その若い人たちが、阿弥陀さまにじいっと合掌している姿はすがすがしいばかりでなく、有難いという思いがするのである。

そして彼らが、どうぞ幸せになれますようにと、彼らに向かって祈ってあげたくなる。

一方、境内では多くの出店に大勢の人たちが群っている。

おでん、焼そば、焼きとり、たこやき、甘酒……などなど、店の人たちの掛け声もきびきびしていて、中に入って行きたい誘惑にかられる。

午前二時も過ぎると、人波が落着いてくる。

「先生、手がすいたら必ず来て下さいね」

といわれていた言葉につられて、私もとある店に入って入った。

隅の椅子に腰かけ、一服していると、

「先生！」

と、一人の若者が歩み寄ってきた。見知らぬ

人だ。いぶかっていると、

「おかげで安産でした。先生、見てやって下さい」

そばに妻子を抱いた人が立っている。彼の妻だった。

話を聞いてわかった。

一年前の大晦日、この店のテントで会ったという。その時、彼女のお腹には赤ちゃんがいた。

「初詣に何をお願いしたの」

と私がたずねたので、

「安産できますように」

と、その時、夫婦は答えたという。

そのやりとりを聞いていた店の主人がいったそうだ。

「このかたは、増上寺の執事さまだ。ここでお会いできたのは仏さまのお引き合わせだ。安産できますようにこの先生にお腹を撫でていただきなさい」

では、ということで、その折私に頼んだの

だという。

そこで漸く私はお腹の赤ちゃんにも聞こえるように、大きな声でお念仏を称えながら撫でてあげたことを思い出した。

この六月に願いのとおりに無事出産したのがこの子です、と教えてくれた。

生後六カ月、名は「あいちゃん」という。

そのつぶらな瞳を見て嬉しくなり頼まれもしないのに、赤ちゃんのかわいい小さな頭を撫ぜながら、

「丈夫で育ちますように」

といってお十念を称えてあげた。

「あいちゃん、よかったわね。有難うございました」

夫が続けていった。

「来年もまたお参りに来ます。先生にお会いできるでしょうか」

私は「あいちゃん」をあやしているうちに来年の成長を見たさに、

「二時すぎに此処でお待ちしましょう」

といてしまった。

「仏さまのおかげなんだよね。こんな大勢の人の中で、同じところでお会いできたんだもの」

若い二人はよほど嬉しかったのか、「来年もまた」を繰り返した。

「あいちゃんは、仏さまの申し子なのかもね」

「どうぞ大事に育ててあげて下さい。楽しみにしていますよ」

店の主人夫婦も寄ってきた。そして、みんな「あいちゃん」のために乾杯した。

あかあかと夜空に照し出された三門。大殿を仰ぎつつ、この一家が幸せでありますようにと祈りながら手を振り合って別れた。

彼らが去って行くうしろ姿に、来年もきつと来てくれるだろう。そしてその次もまた。この子はどういう風に育つだろうか。きっと良い子になるに違いない。やがて高校生に、大人になるだろうが、そうなくてもお参りに

来てくれるかもしれない。

できたら、仏さまの申し子とまでは思わなくとも、仏さまと深いご縁がある私だ、と思つて、お念仏を称えるようになってもらえたら……。そんな願いをもつて見送つたのである。

ちかごろの若い人たちは、と嘆く年寄りが少くないけれども、マスコミなどによって報道される不健全な若者だけを見て、誠実に生きている人たちを忘れないでほしいものだ。

ミーチャン、ハーチャンは若者だけではない、年寄りにだってそういう類の人は少ないのだから。

増上寺に「みこし講」という講がある。およそ二百人ほどの講員がいるが、ほとんど若者である。彼らは本山の諸行事に馳せ参じては奉仕をしている。

初詣の多くの若者たちに接していると、彼らもまた仏の種を宿しているのだということをしみじみと感じるのである。（つづく）

好評の新刊

毎日新聞社刊

寺内大吉著

『沢庵と崇伝』上、下（全二冊）

——黒衣はためく日々——

たくあん漬けで名を残した沢庵と……

この国の官僚の原型となった崇伝……

上巻二六二ページ 下巻二九二ページ

A5判上製 定価 各二二〇〇円

〈発行〉

〒100 東京都千代田区一ツ橋 毎日新聞社

み 仏 と と も に

—23—

—父の念仏信仰とその挫折(2)—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

私の父は、すでに書いたように、昭和三十一年八月十五日、お盆の精霊送りの日の夕刻、鉄道に身をなげて、自ら命を絶ち、お浄土へと旅立って行った。後で聞いた話であったが、すっかり着物から下着まで着替え、すべての盆行事を終って、死出の旅に出たのであった。その頃の父には、その行動にやや奇矯と思われるところがあつたが、死を決意した行動そのものは、まことに立派という外ない。自殺には違いないが、その死に方は念仏行者として、誠にあつぱれと、今更のように父を賞讃せざるを得ない。

父が大切にしていたものは、座敷の奥にある仏壇の抽出しにしまわれていた。しかし、この抽出しもきれいに整理され、父が残してはならぬと考えたものは、すべて整理され、捨て去られていた。安居家の守るべき家訓のようなものが書かれていた台帖があつたが、後日、私が見てみた所、その部分は破り去られていた。何故にこれを破り去ったか分らないが、父は思う所あつて捨て去つたようである。

その台帖に、父が書いた「信心要決」というのが残されていて、その一部を私は書き留めておいた。父自身の

考えを纏めたものか、何かから写し取ったものかよく分らないが、父の信仰は、こうした考えで貫かれていた筈である。それには、次のように書かれている。

我等の住める世界を地球と言う。

地球は大宇宙の一部分にて、大自然と共に生ず。これ大真理の姿なり。これを仏教に於ては大法身阿弥陀という。

衆生はこの自然より分れたるものなる故に、自分という。

されば阿弥陀仏は一切衆生の大み親にして、衆生はその子なり。而して、阿弥陀は無限の慈悲と、無限の光明と、無限の寿命との大精神の持主なり。

吾等子たるものは、真実にこの親にしたい、親に恋し、親の御名を呼ぶ事により、その関係を深くする事を得る。この親子の深い関係を親縁と名づける。

ここに於て吾等衆生の救わるる道がある。

何が故に名号を称する事に依り、救わるるや。仏の本願力の功德に依る故なり。

吾等はこの事を信じて称名する。即ちこれ「疑いなく深く信じて、南無阿弥陀仏と喜び称う。……」

「信心要決」はここで切れている。私の手元の写しがここで亡くなっている為である。この文はよくまとまっておおり、父の文としてはできすぎで、或いは何かを写したものであるかも知れない。しかし、父はこれ位の文は書けるだけの能力もあり、また知識もあった。父がこれを書いたとしても、おかしくはないのであるが、今はその真偽をただす手だてもない。

とも角父は、こうした信心を持ち、お念仏の生活にいとそしんでいた。ところが、昭和二十五年頃から、とんと念仏の数が少なくなり、朗らかであった父から、何故か笑いが消えていった。一体、この理由は何処にあったのであろうか。

かつて私は、父や兄から、一つの大きな事件を聞いたことがあった。それは、戦後の農村を襲った混乱にかかわるものであった。食糧難に苦しんだ日本中は、食物を求めて、農村につめかけた。食糧の買い出しである。金

の余りない人は、焼け残った衣類や、家財道具との交換で食糧を求めた。それは農村にとっては、一つの大きな収入をうる潮時でもあった。そして、農民達は、久し振りに豊かになった。食うものはあるし、金は入ってくるし、こんなよい時代はなかった筈である。

私もまた銀めしを食べるために、田舎に何度か出掛け、米をもらって、時には買って帰った。漸く取り締りがきびしくなり、随分、苦勞したこともある。汽車の荷物棚に米袋をのせておいて、検閲にひっかかり、

「これは、誰のものか」

と聞かれても、黙って知らん顔をしていて、没収されたこともあった。私程の年齢の多くの人が、経験した体験である。

父もそうした時代の流れに乗り、相当の金が入ってきたようである。しかし父は、この金は不勞所得であるとして、み仏に寄附することを考えていた。丁度、檀那寺の常光寺では、保育園の創設が考えられていた。父はその創設資金の一部に、この金を寄附する積りであった

らしい。

丁度その時、或る知人の大工が、やはり仕事の関係で金が必要となり、父に借金をしつくく申し込んでいた。いずれ返つてくる金であるから、寺への寄附はそれからでもよからうと、心根のやさしい父は、その大工にたまっていた金を融通した。ところが、その大工が倒産してしまい、切角ためた金がすっとんでしまった。勿論、返ってくるめどなどなかった。この時の父は、相当のショックであつたらしい。

「切角、み仏のためと思ってとって置いた金を、何故み仏は、お認め下さらなかったのであろうか。すべてよかれと思って、苦しんでいる人に施し、貸し与えたのに、何故こんな結果になったのであろうか。お念仏を唱えていても、こうした善行は認められないのであろうか」

こうした疑問が、ショックと共に父に出てきたようである。それらしいことを、私は父の口から、聞いたことも覚えてゐる。このショックが総てであつたかどうか分

皆様と御念仏し本堂も一回掃除、草取り等致した事喜んで居ります。

貴殿も満足下さい。而し、合点の行かぬ点二三あり。大正十四年念仏会を發起し、死と云う事は安心して、念仏生活に邁進いたし、貧乏世帯もあらゆる事も、切り抜けて来ました。

然るに昭和二十五年以後、夜分少しも睡眠せず。

動物の中で笑ふのは、人間に限るのに、人様と対談しても、笑ふと云ふ事絶対に出来ぬ。

御飯を頂いても、食べないでも同じ事（少し不明部分あり）依て人生を楽しみ暮した事は一日もありませぬ。

三悪道に落ちて居る如な気がして、至極残念です。

御法話の中の五逆罪で、無間地獄の苦を受くべき罪人、終り故に、善知識のススメに依り、念仏往生の御文があり、仏の本願は疑がはぬけれど、前に述べた次第、生存中、人間並の生活にと念願です。

上田先生（上田純明先生）帰郷され善導忌御話、幡随院の事や、香山君の話も、色々されました。都合で上田様と一緒に上京されてもよいとの事でしたが、

二日京都へ用件、五日夜行で帰る予定です。

神林先生（神林礼堂師）は、仲々偉い方と信じます。

先生の御氣に入るよう、日々心得て下さい。お産（私の長男のこと）が五月上旬の如、御安産お祈りします。母もひまな折でしたら、お世話をすると思居ます。六十九歳の齡を迎え、法報応の三身も了解させて貰い、此如な手紙は遺憾の至りです。御自愛の程。總子（私の家内）様へも宜敷。

合掌 父より

これは、父が亡くなる前年の手紙である。写真でみる通り、誠に達筆で、しかも文はしっかりしている。とても老人の鬱病にかかっている人とは思えぬ文である。そしてそこには、自分の念仏生活できぬ苦しみ、笑えぬ人生の苦痛がよく語られている。それでいて、吾が子が大寺に入った心配と思いやり、生れてくる孫への慈愛の情がにじみでている。よくぞこの手紙を取っておいたと、吾ながらも感心し、いまこれを大切に、自分の宝物として保存している。

（つづく）

◎“維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。すでに『浄土』誌は五十三巻に入り、鑽仰会創立以来五十五年をけみしてきました。近年は、弊会の活動も、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して預いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

◎「浄土」表紙版画絵販売についての案内

『浄土』二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、色調を変えて松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。木製の高級額縁代も含めて、**金二五〇〇〇円**というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、一昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

世を去った。

「再現させて、どうするのですか」

「供養するのです。それも未来永劫にわたって消えない形、お仏様として彫りこむのです」

「その仏像は木を刻むのですか」

「石の壁にです。龍門の岩壁にね。そう……あなた方は未だ龍門を知らないね。明日にでも案内してあげます。その石窟がどれほど見事なものであるかを見ることができるとしよう」

語り終えたあと、武后は袖で顔をおおい、さめざめと泣いた。

含風殿における伯母の懺悔ぶりを眺めてきた憚良には、この涙が贖物とは思えなかった。心から悔いあらためているにちがいないのである。

この時期、つまり咸亨二年の秋も過ぎ去ろうとする例年になく寒気のきびしい季節。高宗皇帝は持病の風眩を病んで洛陽宮に籠もり

きりだった。朝務は皇太子の李弘にゆだねられていた。

李弘はすでに二十二歳、立派に成人している。やや文弱の嫌いはあるが、それだけに温和な性格で学問を愛した。重臣たちの建言によく耳を傾け、長安城での政務を遅滞なく処理していたのである。

夕食のあと、憚良は伯母に誘い出されて王宮の北側にひろがる林間を散策した。

「憚良や。じつはね、悲しい出来事があったのだよ。それで一刻も早く供養の工を起したいと思って、あなた方に来てもらったのです。とりわけあの方士先生には妾の肖像を急いでもらわねばならなかった」

「いったい何があったんですか」

「爵周公が殺されたのです」

「えっ、敏之兄さんが？」

何という呪われた一族であろうか。事件と言えば必ず身内の誰かが殺される話ばかりではないか。

「憚良や、信じておくれ。これは妾が手を下したものではありません。命令も下していませんです。不運だった。爵周公は馬で旅しているさなか、引きずりおろされて、手綱を首に巻きつけられ絞め殺されたということですよ」

「何という惨酷な」

「ほんとうに惨酷な……あの可愛らしい敏之が、気の小さい男が恐怖におびえて死んでいった顔が目に見えるようです」

爵周公敏之は、亡き韓国夫人が亡夫賀蘭越石との間にもうけた長男である。魏国夫人の実兄にあたり、一族の者は「敏之兄さん」と呼んで親しんできた。

明るいい性格で、加えて類い稀れな美貌の持ち主でもあった。

欠点と言えば、その美貌である。成人すると、やたらと女色にふけた。溺愛する祖母の楊氏——榮国夫人とも男女関係があったと噂されていたほどである。

敏之が皇太子李弘の嫁に決まっていた楊思儉の娘を犯してしまった。祖母榮国夫人の実家につながる家系の娘であった。

「資治通鑑」と書く。

——敏之、貌美にして太原王妃（榮国夫人）に蒸す。妃の喪に居るに及び、衰絰（喪服）を釈（と）き、妓を奏す。（遊女と戯れた）司衛少卿楊思儉の女、殊色有り。上（高宗）及び后（武后）自ら選びて以て太子（李弘）の妃となさんとする。昏すること日あり。敏之、遷りて之に淫す。后、ここにおいて、表して敏之の前後の罪惡を言い、竄逐（さんちく）を加えんと請う。六月丙子（咸亨二年・六七二）勅して雷州（広東高雷道）に流し其の本姓に復す。韶州（広東嶺南道）に至り、馬韁（ばきよう・手綱）を以て絞りて死す。朝士、敏之と交遊するに坐し、嶺南に流さるる者、甚だ多し。

つまり敏之が広東省へ流罪になった折、かつての遊び仲間も多数が流された。その誰かが、許されようと願って敏之を手綱で絞殺したというのである。

姉魏国夫人の母子三人を全員、直接あるいは間接に殺害したことになる。武后としては供養を急がずにはおれなかったであろう。

翌朝のこと、王徐明もまじえて三人は馬車を仕立てて洛陽宮を出立した。文章博士や学僧ら数人がこれに随行した。

洛陽の街から南へ三里。伊水と呼ばれる急流が見えてくる。東西の兩岸には岩山が迫り、それらが平地にいきなり屹立し、あたかも門闕のような景観を呈していた。龍門の名が由来する。

岩山には無数の洞窟があった。その岩壁に仏龕が造られ、仏菩薩の像が安置されたり刻まれていた。

随行の学僧たちは説明する。

北魏孝文帝の太和年間に造立されたものだ

という。五世紀の末葉である。

北魏は胡族の王朝である。遠く北方の平城（大同）に都していた。そこには有名な雲岡の大石窟がある。

孝文帝は即位すると胡風の漢化を施策の軸芯とした。首都を平城から荒廃した洛陽へ移してきた。支那の中原を支配し、名実共に漢の聖王子として君臨したかった。洛陽を整備する業と併せて、龍門の石窟に大同雲岡の再現を夢見たのだった。

だが、硬い岩壁に刻みつけるには長い歳月と莫大な費用労力を必要とする。孝文帝一代では完成できず、その子宣武帝も父王の意志を継いだ。

孝文帝が龍門石窟に注目した動機に、雲岡の再現もあったが、彼の周到な仏教対策を見逃してはならない。

平城（大同）に首都があったころ、雲岡石窟と併行して城内には百余の寺院伽藍が建立され、僧の数は二千人を越えたと言われる。

当然これらの僧は政治へ介入してきて幾多の弊害をもたらした。叛乱の禍根となったこともあった。

そんな弊害の発生を防ぐために孝文帝は洛陽城には永寧寺と尼僧寺だけしか許さなかった。僧院の俗化をきびしく戒めた。純粋な修法道場、祈願所としての龍門石窟である。

ただし、この戒めも宣武帝の後半には崩れ、五十五層のそびえる永明寺や瑤光尼寺など伽藍が城内に林立するようになった。沙門三千余人が住みついた。

仏教は栄え、中インドの勒那摩提や北インドの菩提流支などすぐれた渡来僧が多く、經典をもたらし、訳経史上に巨大な足跡を印している。

ところで北魏時代の洛陽城は現在よりも十八里ほど東寄りにあった。白馬寺を過ぎた地域である。隋の煬帝が現在地に大王城を築いた。ために北魏の造像は伊水東岸の石窟が多い。擂鼓台、万仏溝、看經寺などと並んでい

る。

白髯をたくわえた老文章博士は西山石窟の巖頭へ登り、指さしながら説明した。

「靈太后の祈願仏が多いようです。それも生んだわが子が皇太子位に就いたために殺された後宮の側室たちを供養して……」

「皇太子を生んだ女は殺されるのですか」
則天武后は眼をみはった。

「そうです。それが魏王朝の掟だったのです」

文章博士は学究らしく表情を全く変えようともしない。



靈太后は宣武帝の側室であった。胡族の出身だったために父王の孝文帝が正后となることを許さなかったのである。漢人の高氏が皇后に選ばれた。

靈太后は宣武帝の子供が生みたかった。願いがかなって、やがて妊娠する。正后には子供がいなかった。生まれた子が男児だったら間違いなく皇太子となるであろう。それは同時に生母靈太后の死を約束していたのである。一族の者たちは王城を脱出することを彼女に説いた。

だが「太子の母ならば死するも辞せず」と靈太后は敢然と王宮に踏みとどまった。

月満ちて身二つになった。願いどおり男児が誕生した。

夫君の宣武帝は祝福と慰さめの言葉をかけるために靈太后の産室を見舞った。優詔をひと声もらえば、彼女は刑場ち引かれてゆく運命であった。

老文章博士は、つい昨日の出来事のようにその場面を語り続ける。

「靈太后は澄んだ眸を一点も曇らせず、敢然と言った。王よ、あなたは父王の遺志を継いで移風易俗につとめて来られました。でも太

子の母を殺すという胡風胡俗を守りとおされることでしょう。妾はこのまま殺されても悔いはいたしません。ただこの胡風胡俗は妾で最後にして下さいませ。宣武帝はじつと靈太后を見つめた。漠北の野を疾駆した胡族の荒肌に帝堯、帝舜の徳政を塗りたくったおもりで、この言葉でたちまち粟粒を生じさせてしまったのだ。妃よ、余は誤まりを犯しておった。大臣どもが何と申そうとも余は妃の身を護ろう。心おきなく、健やかに太子を育ててくれと……靈太后は生母として宮廷で生き永らえた。正后の高氏は尼となって瑤光寺へ出家した。その男児が孝明帝で、此処にもその造仏が数多くある」

「おお、たしかに胡族の蛮風は女人を一粒の砂礫としか扱いません。魏王朝に限りませぬ。わが唐王朝にもなお胡風胡俗の遺風が消えていません」

感動した則天武后は両眼に涙を溜めて言いつづけた。

ある。見上げると塔の金盤が太陽に輝き、その光りがはじきかえって雲を崇厳な色彩で照らしだした。軽金の風鈴は風に鳴り、妙なる音色を頭上で奏なでた。菩提達摩は讃嘆の絶唱をくりかえした。仏国土が見えてきたからである。

この菩提達摩は中国禅宗の祖、面壁十年なとで有名なダルマ大師である。永寧寺高塔下に立ったときは寿齡百五十を超えていたという。そんな詮索よりも達摩が口にした「讃嘆の絶唱」が重要である。

「南無！」

中国人はこのとき初めて「南無」という表意語を耳にし、それが仏を讃嘆する仏教徒共通の合言葉だったことを知ったのである。

「南無」はこのあと、中国全土に広がり朝鮮半島を経て、日本列島の隅々にまで浸透していった。

北魏の歴史を老文章博士は、さらに語った。

孝明帝は十九歳の若さで世を去る。嗣子がいなかった。靈太后は臨洮王の嫡子を立て帝位を継がせた。わずか三歳の幼帝だった。

この皇位継承にも暗い影が付きまとう。孝明帝の死自体が毒殺であった。孝明帝が山西の太原王尔朱榮とひそかに氣脈を通じ、生母一族の専横に歯止めをかけようとする陰謀が暴露したためだった。

この太子のためなら命を捨てても、と誓った靈太后のけなげな母親像はどこへかき消えてしまったのか。自らの手で成人したわが子を毒殺したのだった。

靈太后をうんぬんする前に「王政」そのものが内在させる権力悪を注視しなければなるまい。

三歳の幼帝を擁して専横の限りを尽した靈太后の陽春も永くは続かなかった。すぐ翌年の孝昌三年（五二七）の十二月、洛陽にある平等寺で異変が発生した。

寺の門外に金像が一体立っている。高さは

に成るものであった。北魏が種を蒔いた仏教信仰は政治権力とは別の土壤で結実していったのである。中国仏教史を支える名僧、学僧の多くが「雁門」出身者であった事実が、よくそれを実証しているであろう。

だがそんな歴史の骨質を、いま老文章博士たちは語ろうともしない。きらびやかで豪壮な権力者の奉仏だけに触れる。

「とにかく旧記によりますと、靈太后がこの龍門石窟の造像に要した費用は東山の分だけでも八十万二千三百六十六人分と書いております。その労賃の総計なのでしょう」

引用した旧記とは、「魏書釈老志」であろう。

——景明初（五〇〇）世宗（宣武帝）大長秋卿ノ白整ニ詔シテ代京（大同）ノ靈巖寺石窟（雲岡）ニ準ジテ、洛南ノ伊闕山（龍門）ニ於テ高祖（孝文帝）トソノ皇后文昭皇太后ノ為ニ石窟二カ所ヲ營マシム……（中略）永平中（五〇八）中尹ノ劉騰（宦者）ガ奏シテ世宗ノ為ニ

一窟ヲ造リ、凡ソ三窟トナス。景明元年ヨリ正光四年（五二三）六月ニ至ル用功（費用）八十万二千三百六十六。

これに西岸の石窟にかかった費用が加算されるわけである。おびただしい金銀と労力とが注ぎこまれたことになる。

老文章博士たちがことさらに費用の点を強調するのは、則天武后から石窟造像の意志を聞かされたからにちがいない。容易ならぬ経費がかかるぞ、と警告しているのである。

十四洞から十七洞まで、小規模な石窟がっらなっていた。どこの壁面にも仏菩薩像や仏を祀る仏龕が刻まれてあった。なかには工程半ばで放置したのももふくまれる。

説明者たちは頻々と訪れているのである。どこの石窟も内部を掌心を指すごとく知り尽していた。暗い石窟内を掻き分けるようにして壁面の薄れた年号を探がし出して武后に示した。

十四洞は普泰元年(五三一)で北魏の末路に近い年号が仏龕に刻んである。十五洞の不詳年号二年も釈尊像自体が北魏仏と推定されるので孝昌二年ではなかろうか。ただし、これは現代の推定である。

十七洞は現代「魏字洞」と呼ばれるほどで正光四年(五二三)から孝昌二年(五二六)にかけて、つまり靈太后時代の年号が維摩像や千仏を頂いた仏龕がびっしりと録されている。

十七魏字洞の先が十八唐字洞である。唐朝の造像が多く現代そう呼ばれてはいるが、入口に西魏の仏龕があり、当時は十七洞から連関していたはずである。

この十八洞を過ぎると、石壁は豁然と切り開かれ、三十メートル四方にも及ぶ広い台地へ出た。見上げる三方に十数メートルの石壁が台地をとり囲んでそびえ立つ。

一体の摩崖仏も刻まれていなかった。

則天武后は、しげしげと三方の石壁を見上

げている。

「此処にこうした広場がありますので、参拝者もひと息入れられるのです。まさに天の与え給うた憩いの場所です」

老学究を眼を細くして足下の伊水の流れを眺めた。彼自身もひと息入れている。

「憩う場所ですか」

武后は呟くように訊き返す。

「酷暑の季節なぞ、此処へきますと涼風を楽しむことができます」

「此処ですよ」

「何が、此処なのですか」

文章博士は聞きとがめた。

「あの崖に刻むのです。最も巨大なお仏様を」

「あの石壁にですって？」

「そうです。石窟の王となるでしょう」

「しかし、王后。此処では石窟と申せませぬ。天蓋もないただの……」

山肌にすぎないというのである。

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙七〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年 一月二十五日 印刷

昭和六十二年 二月 一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八―八二―八七番

第五十三卷 二月号
昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十二年一月二十五日印刷 昭和六十二年二月一日発行